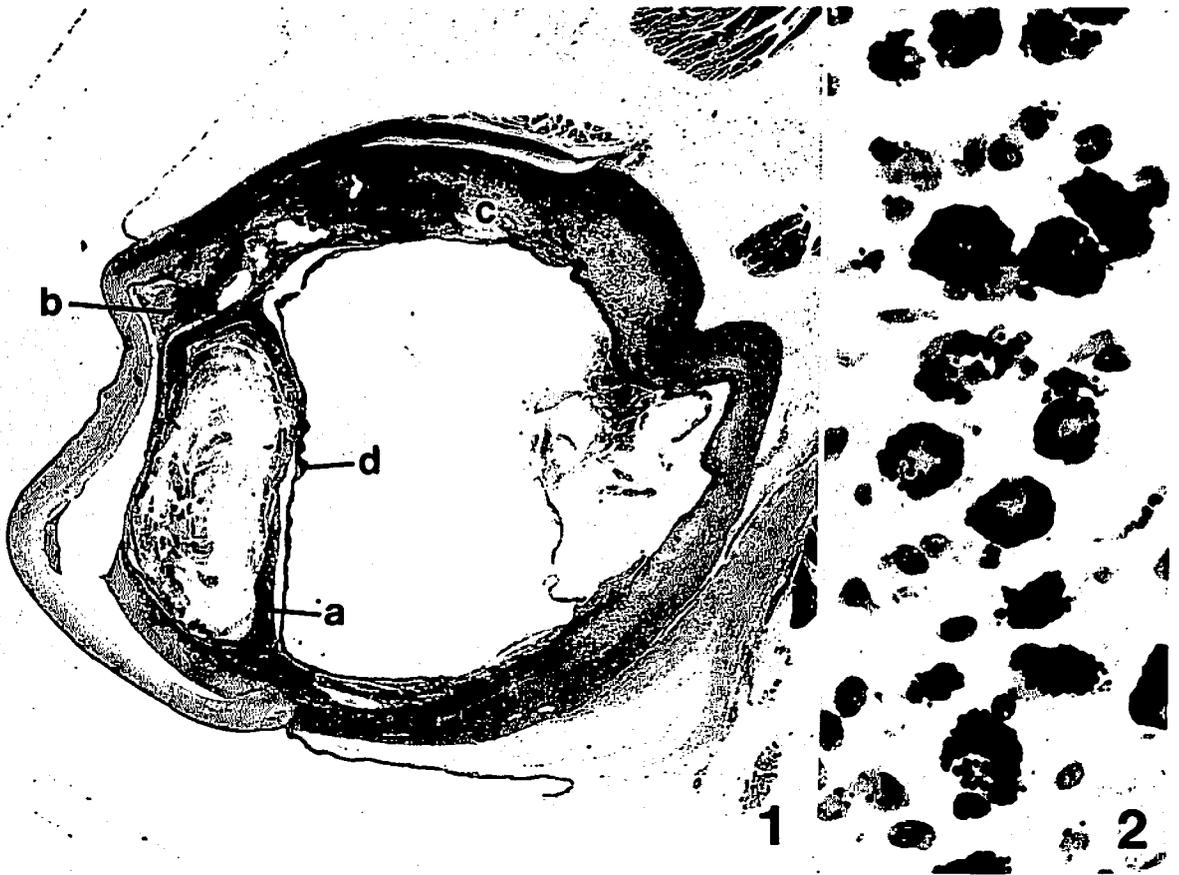


秋田犬にみられた慢性び漫性ブドウ膜炎

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第28回獣医病理学研修会提出標本No.502



動物：犬，秋田犬，雄，13ヵ月齢，黒白ブチ。
臨床：1987年5月22日初診，両眼球の角膜軽度白濁，眼瞼結膜充血，羞明その後失明。ステロイド療法（プレドニゾロン内服）および抗生剤併用により，失明は残るものの眼瞼結膜充血は消失した。7月20日再発し，口唇，鼻鏡，顔面皮膚に限局性脱色素斑及び糜爛がみられ，臭気が強くなった。その後プレドニゾロンの投与量を徐々に減らしていったが，眼症状の再発とプレドニゾロンの投薬を繰り返し，10月1日安楽死させ，剖検した。
肉眼所見：両眼球突出，角膜白濁，虹彩脱色，結膜充血，眼瞼および鼻鏡の脱色，鼻鏡の出血などがみられた。
組織所見：角膜は不整で，ヘモジデリン沈着がみられた。辺縁部の水晶体線維は変性崩壊し，好酸性になり（図1，a，×4.4，HE染色），白内障に陥っていた。毛様体には骨化を伴う石灰沈着と類上皮細胞，リンパ球，メラニン保有大食細胞の集簇が認められた。虹彩は肥厚し，リンパ球浸潤，メラニン色素，ヘモジデリンの沈着および虹彩後癒着（図1，b）を示した。ブドウ膜の肥厚と脱色素が顕著であり（図1，c），脈絡膜には高度のリンパ球と類上皮細胞の浸潤が認められ，メラノサイトはほ

とんど消失し，替わってメラニン色素を有する大食細胞が遊離していた。その細胞の顆粒はマッソンの鍍銀染色で黒染し（図2，×900），それは漂白された。電顕では自家食胞内にメラノソームが取り込まれている像が観察された。メラニン色素に混ざってやや色調の異なるヘモジデリン顆粒を保有する大食細胞もみられ，その細胞はベルリン青染色で鉄反応陽性を示した。網膜は変性剝離し脈絡膜表面ではタペタムの変性がみられ，鉄反応陽性の泡沫細胞が認められた。変性剝離網膜（図1，d）は水晶体後面と癒着しており，血管新生とリンパ球浸潤，ヘモジデリン沈着がみられた。視神経では神経線維の空胞化，その中に硝子様球状物がみられた。その他脱色を示す鼻鏡表皮の胚芽層ではメラニン色素の減少と真皮におけるメラニン色素を貪食しているラングハンス型巨細胞の小集簇，メラノサイトの散在および形質細胞の浸潤が認められた。

組織診断：秋田犬にみられた慢性び漫性ブドウ膜炎（Vogt-小柳-原田症候群様疾患）

本病は秋田犬の若齢犬に多発し，メラノサイトに対する一種の自己免疫病と考えられている。